

103

各種心疾患の治療前後における¹²³I-MIBG心筋シンチグラム指標の変化
寺田幸治¹, 杉原洋樹⁴, 木下法之³, 伊藤一貴³,
河田 実², 門阪庄三¹, 梶田芳弘¹, 中川雅夫³
(1:公立南丹病院 内, 2:同 放, 3:京府医大 2内, 4:同 放)
MIBG心筋シンチグラム(MIBG)の定量的指標を治療前後で比較。
拡張型心筋症(DCM)25例, 弁膜症(VHD)10例, 高血圧性肥
大心(HHD)10例, 褐色細胞腫(pheo)2例の治療前後でMIBGの
心臓縦隔比, クラランス, 欠損領域角度を算出。DCMは心²⁰¹Tlシン
チグラフィで駆出率(EF)を算出。EFやNYHA分類とMIBG指標と
を対比検討。EF改善例で各指標は改善、EF悪化例で悪
化。各指標の変化量はEFの変化量と有意に相関。DCM, VH
Dで各指標の変化はNYHA分類の変化と関連。HHD, pheoで各
指標は改善。MIBG指標にはそれぞれ問題点があるが、
治療による重症度変化はいずれにも反映され、各症例毎
に適切な指標を選択しての経過観察が可能と示唆された。

104

胸痛を有する各種心疾患患者における¹²³I-MIBG心筋シンチグラフィ所見
長島賢司、後藤紘司、渡辺元博、渡辺佳彦、小西得司、
近藤 武、大角幸男、倉田千弘、安藤晃禎、大手信之、
皿井正義、額額雅明(21世紀カンファレンス; 東海)
各種心疾患患者における¹²³I-MIBG心筋SPECTの集積
低下部位の広がりとは²⁰¹Tl SPECTのそれに比し大であると
されている。一方、¹²³I-MIBGの集積低下は必ずしも異
常所見とは言いがたい。今回我々は胸痛を有する疾患
(MI, AP, VSA, NCA, chest pain synd.) 61例を対象に
¹²³I-MIBG 静注後20分と4時間にPlanar像とSPECT像を撮
像し視覚的defect scoreとwashout, H/Mを求め疾患ごとに
比較した。またこのうち52例に²⁰¹Tl SPECTを施行し
¹²³I-MIBGと²⁰¹Tlのdefect scoreの差について疾患ごとに比
較した。その結果疾患ごとにdefectの差の大小に有意差
はなく、また、部位別にも差はなかった。

105

難治性心不全に対するamiodarone(AMD)の
効果-¹²³I MIBGによる効果判定-
河合裕子、木住野皓、赤城秀哉、山口隆義(北光循環器病
院) 廣江道昭(東医歯大二内)
AMDは抗不整脈薬であるが、慢性心不全例に対しても
有用との報告がある。我々は心不全症例に対して本薬を
投与し、¹²³I MIBGによる交感神経機能イメージングを用
いて効果を判定した。対象は左室駆出率30%以下の男
性7例。NYHA心機能分類、心胸郭比、左室駆出率、
¹²³I MIBGについて治療前後の変化を評価した。1) 左
室駆出率、NYHA心機能分類、心胸郭比は改善した。2)
4時間後のH/M比は 1.3 ± 0.2 から 1.8 ± 0.2 ($p < 0.05$)
へ、洗い出し率は $41 \pm 5\%$ から $34 \pm 6\%$ ($p < 0.05$)へと
改善した。H/M比の低下と洗い出し率の上昇が見られ
た。¹²³I MIBGによる交感神経機能イメージングは心不全
の治療効果判定に有用である。

106

心肥大を呈する心疾患のMIBG所見-肥大型心
筋症と大動脈弁狭窄症の検討-
中津川昌利, 外山卓二, 直田匡彦, 磯部直樹, 星崎 洋
大島茂, 谷口興一(群馬県立循環器病センター)
肥大型心筋症(HCM)と大動脈弁狭窄症(AS)の心臓交感神
経, 除神経の状態をMIBG心筋シンチにて検討した。対象は
HCM10例 AS 5例である。全例に安静時にMIBG心筋シン
チの正面planar像およびSPECT像の早期および後期(4h)
像を撮像した。正面planar像よりwashout rate(WR), 心縦
隔比(H/M), SPECT像より20区域の欠損スコアの合計
(TDS)と欠損部位を検討した。心エコーにて肥大(中隔+後
壁), LVEFを評価した。両疾患間に心肥大, LVEFに有意
差を認めなかった。H/M(4h)はHCM 1.77 ± 0.2 , AS 1.81
 ± 0.2 共に低下していた。またWR, TDSには有意差はな
かった。欠損部位ではASが心尖部を中心に下壁におよん
でいるのに対しHCMではさらに中隔にも欠損を認めた。

107

急性心筋梗塞におけるACE阻害剤の¹²³I-MIBG
とRT dispersionに及ぼす影響
正井美帆, 森田雅人, 酒木隆壽, 有井 融, 志水敬子, 成瀬 均,
大柳光正, 岩崎忠昭(兵庫医大一内), 福地 稔(同核)
急性心筋梗塞(AMI)において交感神経機能障害(SA), 再分
極異常(RA)に及ぼすACE阻害薬の影響を検討した。AMI17例
をlisinopril投与群ACEI(+)7例と非投与群ACEI(-)10例の2群に
分類。2-3週間後にTI, MIBGを施行, SPECT像を9分割し視覚
的にnormal-3からdefect-0の4段階に評価, TI・MIBGの合計の
差をTI-MIBGとした。同時期に体表の16誘導点より
recovery time (RT)を測定, 心拍数で補正した最大値と最小値
の差をRTc dispersion (RTcD)とし, 両群間におけるTI-MIBG
およびRTcDの差を検討。結果はTI-MIBGとRTcDは相関を認
めた。TI-MIBG, RTcDともにACEI(+)群で有意に小さかった。
以上よりAMI後のACE阻害剤は, SA, RAを改善することで,
予後を改善する可能性があると考えられる。

108

¹²³I-MIBG心筋シンチを用いた急性心筋
梗塞の長期経過観察例での検討
窪田靖志、松原欣也、立川弘孝、上床博久、北村和人
(京都市立病院 内科循環器科)
急性心筋梗塞で早期再灌流療法を施行した症例の経年的
変化について検討した。対象は過去平均4年間で発症し
た急性心筋梗塞例で発症2週間以内、3から6ヶ月、平均
4年の3時期にTI-201およびMIBGシンチを施行、SPECT
に再構成し視覚的な検討をした。MIBGシンチは3から6
ヶ月に前壁で改善、下壁で症例間の差を認め、4年後で
は両者ともさらに改善する症例が存在したが、下壁の
TI-201とは一致しなかった。3から6ヶ月後、TI-201の正
常例では以後のMIBGの改善が少なかった。結語として
急性期にTI-201に欠損が生じた症例は経年的変化を経る
に従いTI-201と同様にMIBGも改善する可能性がある。